



ホームページ開設とその後の活動 —情報公開とPR活動の現状と今後について—

瀬戸 嘉枝

I. はじめに

1997年7月に開設した当図書室のホームページも、すでに3年以上が経過した。図書室内の「インターネット利用サービス」も開設の翌年より本格的に始まり、当時1台だった学生用のパソコンも今では2台になり、より利用者が使いやすい環境になってきている。さて、「情報公開」と「PR活動」が目的で始まった図書室ホームページだが、では肝心のその反応はどうなっているのだろうか？ 今回、再びホームページに関する原稿依頼を受けたのを機会に、今までの経過やその反応、そして今後の課題等について考えてみた。

II. ホームページ作成の流れと公開した資料について

当図書室では、ホームページ作成にはAdobe PageMillというホームページ作成用ソフトを使用している。ホームページはHTML言語で書かれたテキストファイルで構成されているが、初心者はこのHTMLでつまずくことがある。当図書室の場合も担当者がなかなかHTML言語を理解できなかったため、上記のソフトを使用して作成することになった（作成用ソフトを使用するにしても、できればHTML言語についての知識があった方が良くと思う）。

当図書室ホームページの構成を（図1）に示

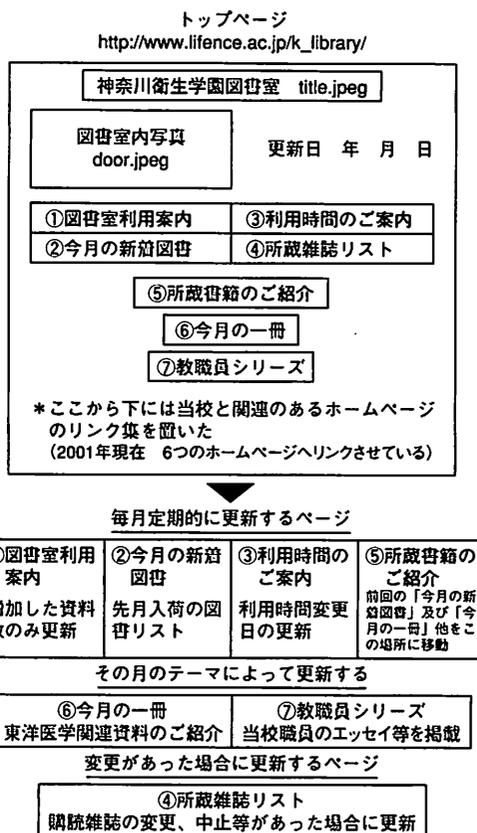


図1. ホームページ作成の構成図

した。更新は、夏休みを除き、毎月1回（原則として月初め）、「トップページ」内の更新対象の項目を更新している。更新作業は期間を決め、日常作業と同じように規則的なものにし（毎月の業務カレンダーに更新準備期間と更新日を記入）、なるべく特別な仕事としないように心がけた。定期的な更新内容のものは、慣れてくれ

ばそれほど日常業務に支障がなかったと思う。但し、画像の工夫はあまりしていない。あくまでも更新することを一番に置いているので、今は自分の力に合ったホームページ作業をしている。さて、ホームページを開設したが、問題はその内容だ。すでに多くの図書館が情報を公開している。例えばサーチエンジンYahooの「図書館」という項目を選択すると、その下にたくさんのカテゴリ(図2)が存在している。そんな現状の中で、当図書室の特色を生かした情報公開ができないだろうかということ考えた。



図 2.

所蔵書籍のご紹介

http://www.lifence.ac.jp/k_library/list.html

著者別書籍紹介一覧

増永 静人	間中 喜雄	深谷伊三郎	沢田 健
柳谷 素霊	野口 晴哉	本間 祥白	芹澤 勝助

今月の一冊リスト (1999年度)

「マッサージ 指圧・按摩入門」	「鍼灸ノートブック」
「ケルロク氏マッサージ学」	「図説 新・人間医学百科」
「鍼灸按摩史論考」	「仁神術」

今月の一冊リスト (2000年度)

「筋診断法精義」	番外編「初心者向き東洋医学の本」
----------	------------------

1999年度新刊書リスト

- ・4月の新刊書・5月の新刊書・6月の新刊書・7月の新刊書
- ・9月の新刊書・10月の新刊書・11月の新刊書・12月の新刊書
- ・1月の新刊書・2月の新刊書・3月の新刊書

2000年度新刊書リスト

- ・4月の新刊書・5月の新刊書・6月の新刊書・7月の新刊書
- ・9月の新刊書・10月の新刊書・11月の新刊書・12月の新刊書

*上記の空欄部分は2001年中に掲載予定

図 3. ホームページ上で公開している資料の一覧 (2001年1月現在)

そこで、鍼灸マッサージの専門学校という特殊な立場を生かし、「東洋医学関連」の情報に重点を置いて資料を作成していくことにした。毎月のテーマ項目については教職員にも協力を得ることができたので、東洋医学関連資料を紹介する「今月の一冊」と当校教職員のエッセイ等を紹介する「教職員シリーズ」の2つの項目のどちらか1つを採用しながら更新を続けている。顔写真入りの教職員の参加により図書室のホームページが少し華やか?になったと思う。

毎月の新着書籍とともに紹介してきたテーマ項目の東洋医学関連の所蔵書籍も、この3年間で徐々に追加され、(大きな図書館に比べれば微々たる数ではあるが)最近になってやっとまとまった資料になってきた(図3)。

Ⅲ. 当図書室のホームページは活用されているのだろうか

ホームページ開設をきっかけに図書室内での学生用インターネット閲覧サービスを1998年1月より本格的に開始した。当校では図書室でインターネットが利用できる条件として、事前に必ず「インターネット説明会」を受けることを約束とした。説明会は1回に1~4人までとし、時間はそのグループにより15~30分とした。最初の反応は大きかったが、その後は新年度時のオリエンテーションのある4月に集中し、あとは教員から紹介があった月などに集中しただけで、思ったよりも平穏で、日常業務にもそれほど大きな影響もなく今日まで続けている(図4)。ただ問題なのは、説明会では時間の関係で最低限の説明しかできないので、間違った利用方法によるトラブルが発生することがある。これに関してはその場できちんと対応ができるように、担当者が今後さらに勉強しないといけない点だと反省している。

さて、上記のように図書室内でインターネットが利用できる環境が提供されるようになったが、当図書室のホームページの情報はどれだけ利用されているのだろうか? 図書室内のパン

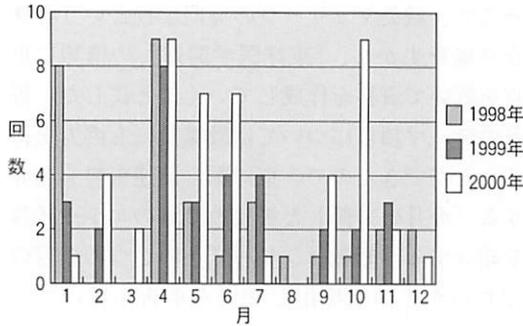


図4. インターネット利用説明会の推移

コンは最初のブラウザ画面に当図書室のホームページ画面が表示されるように設定されているので、必ず図書室のホームページを見ることになるはずだが、残念なことに、大抵の場合はすぐに画面を変えてしまっているようである。在校生にとって新刊情報などは直接「新刊書コーナー」を閲覧すればいいので、わざわざホームページでチェックする必要もないのかもしれないが、ホームページ上には新刊以外の情報も掲載しているので、在校生の利用がかなり低いというのは残念なことである（自宅のパソコンで見てから、問い合わせをしてくる学生もあるが、かなり少数である）。教職員に関しては、1998年6月からLAN環境によって全員がインターネットを利用できるようになり、個人でのメールアドレスも取得したので、ホームページ画面から、こちらに直接問い合わせのメールを出すことも可能になった。多忙で図書室を利用できない教職員にとっては、便利な機能ではないかと思うのだが、やはりあまり利用がないようである。内部への情報発信としては、当校の場合は現状ではあまり効果がないようだ。その原因のひとつとして図書室からのPR不足ではないかと考えられる。ホームページを開設したことは知らせてあるが、その後の更新状況などについては、特に何のPRもしていなかった。これでは、ホームページの存在を忘れられてもしかたのないことだ。今後はその点を改善していかないといけないだろう。では、外部への情報発信の反応はどうだろうか？ こちらのほうは、わ

ずかな件数ではあるが、ホームページを閲覧した方からメールや電話で問い合わせを受けている。問い合わせの内容は所蔵書籍に関するものが中心だが、中には閲覧したいということで、今までに1名だけが直接来校した例があった。問い合わせを受けた書籍は東洋医学の専門書がほとんどで、その内容としては取り扱い書店や、発行所の電話番号の問い合わせがほとんどであった。卒業生からも問い合わせメールを受けているが、やはり東洋医学関連の資料に集中している。そのことから、改めて東洋医学の書籍は探しにくい存在だということがわかった。小さな専門学校が外部（卒業生も含め）へ情報公開することは、ホームページという存在がなければ、かなり難しかったと思う。その点では、インターネットの大きな力を実感した。

IV. 小さな図書室でホームページは生かせるのだろうか

ホームページを始める前に考えなければならぬのは、ホームページを現在の仕事にどのように生かすかということだと思う。ホームページを作成することで業務が滞るというのではなく、担当者にとっても利用者にとっても役に立つような存在にしたいと思う。そしてホームページを公開したということは、同時にその後の更新を考えていかなければならない。ホームページの特徴は新鮮さと即答性にあることも考えると、できれば閲覧者からのメールにも早めの回答ができることが理想だと思うが、小さな図書室では兼務であることも多く、1人の担当者があらゆる仕事をこなさなければならない現状がある¹⁾。パソコン画面が常にインターネットに接続されているような環境を作ることは困難なことと思うが、ホームページを使って利用者への情報提供サービスが広がり、情報発信することで担当者自身が新たなやりがいを感じていけるようであれば、ホームページの作成は意味のあるものになってくるだろう。担当者1人の場合、担当者自身が慌ただしくその場での対応

が難しい場合がある。利用者の中には頻繁に図書室に来られないというような状況もあるだろう。そのような場合、ホームページ公開をうまく生かすことができれば、今まで以上のサービスが提供できるのではないだろうか。実際にその機能を十分に生かしている病院図書室も存在している^{2) 3)}。当図書室のホームページはまだ十分な機能もないが、まずはできることから始めようという気持ちで続けてきた。担当者のパソコン技術のレベルも低く、環境も万全というわけにはいかない現状ではあるが、少しずつでも前進していけるよう努力していきたいと思っている。

V. PR活動をしよう

図書室はなかなか外部と接触する機会がないために、どうしてもPR不足になり、そのために、さらに外部から離れてしまうという傾向があると思う。学生時代に「図書室は利用者によって作られる」ということを司書の先生から教わったが、まさにその通りで、図書室だけが頑張っても空回りしてしまう。図書室の仕事（サービス等）は理解されにくく、孤独になりがちだが、本当はたくさんの人の理解と協力が必要な場所だと思う。図書室の環境を整えるためにも周囲の力が必要になってくる。それには図書

室側から努力していかなければいけないだろう。そのためにはまず図書室という存在を知ってもらわないと始まらない。当校では、そのPRの手段のひとつとして、今後もホームページ活動を続けていく予定でいる。PRの方法としては「オリエンテーション」、「図書室新聞等の掲示」、「利用案内等のパンフレットの作成」、「ホームページの公開」など様々な手段がある。どれが一番良いということはなく、その時の状況や対象者に応じた使い分けが重要だと思う。どれも一辺にはとてもできないが、積極的なPR活動に向けての準備はしていきたい。そして利用者が気軽に意見を出せるような図書室にしていければと思っている。

参考文献

- 1) 編集委員会：アンケート「図書室兼務の立場を考える」報告と考察. ほすびたるらいぶらりあん. 1999 ; 24 (4) : 288-292
- 2) 松本純子：総合病院による情報共有と病院図書室. 病院図書室. 1999 ; 19 (3) : 141-144
- 3) 尾崎那知子：ホームページに管理機能を詰め込んで. ほすびたるらいぶらりあん. 2000 ; 25 (1) : 32-36